

## 宮城県名取市におけるセリ田の水管理に関する研究 Water Management in Paddies of Water dropwort in Natori, Miyagi prefecture

○加藤 幸<sup>1</sup> 千葉 克己<sup>2</sup>

KATO Koh CHIBA Katsumi

### 1. はじめに

春の七草に数えられるセリは古くから栽培されてきた国産野菜である。特に東北地方では冬の青物野菜として栽培されてきたのに加え「仙台セリ鍋」などを中心に新たな食文化として認知度を高めている。しかし、セリを育てる「セリ田」には、沼地や泥田で栽培する地域も多いほか、宮城県名取市周辺のように乾田で地下水を利用した栽培が行われている地域もみられ地域差が存在する。さらに、栽培技術に関してはセリなどの伝統野菜は地域内で情報を秘匿し、独自性を守ってきた側面があるため、後継者が不足する昨今、栽培技術の途絶が心配される。

一方で近年、積極的な栽培情報の発信、共有により産地間連携を図ることで産地の共存を進める動きが見られる。本報告では、このような活動の中心となっている宮城県の生産者によるセリ田管理をデータ化することで活動の支援を目指す。

### 2. 対象と方法

宮城県名取市下余田地区のM園のセリ田を対象とした。セリ田の総面積は約40aで約250mmの畦畔に囲まれている。セリは前年の優良株を翌年の種ゼリとして利用する。対象地域では春～秋期で種ゼリを生殖成長させ株を増やした後に一旦収穫し、芽出しを行った後に裁断してばら蒔く「バラ蒔き法」により作付けを行っている。作付け時期は、田ごとに時期をずらしているほか、1枚のセリ田内でも畦シートを活用し細分化し収穫時期を調整している。本報告では、**Fig.1**に示すセリ田の水尻部に設置した水位センサー（HYDROS-21）、土壌センサー（TEROS-11）、気象センサー（ATMOS-41）を使って、セリ田の管理方法を検証する。測点付近の作付けは2022/11/8であった。

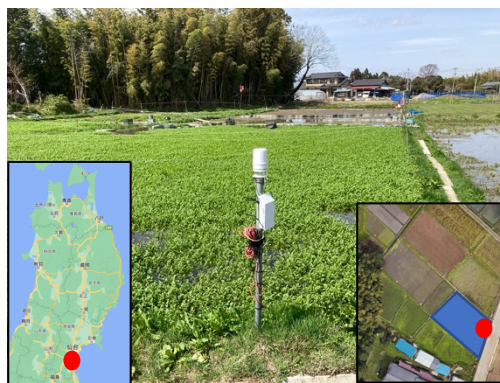


Fig.1 調査対象のセリ田  
(Google Map 引用改変)  
Investigated paddies of water dropwort

### 3. 結果と考察

#### 1) セリ田の気温・水温・地温

**Fig.2**に2022年11月以降の調査対象のセリ田の気温と水温・(田面)地温・湛水深を示す。なお、11/8の作付け直後は種ゼリが浸る程度の湛水深だったため、水温・地温と湛水深の測定は水位がある程度に達した2022/12/14より開始した。対象のセリ田のある名取市では、平年であれば冬日は数日程度であるが、2022年の12月から2023年の2月にかけて寒波が襲来し、12/20に-4.3℃、1/25に-6.9℃、2/16に-5.0℃など例年のない

1. 弘前大学農学生命科学部(Faculty of Agriculture and Life science, Hirosaki University),

2. 宮城大学事業構想学群(School of Project Design, Miyagi University) ,

キーワード：灌漑水温、水田灌漑、セリ田

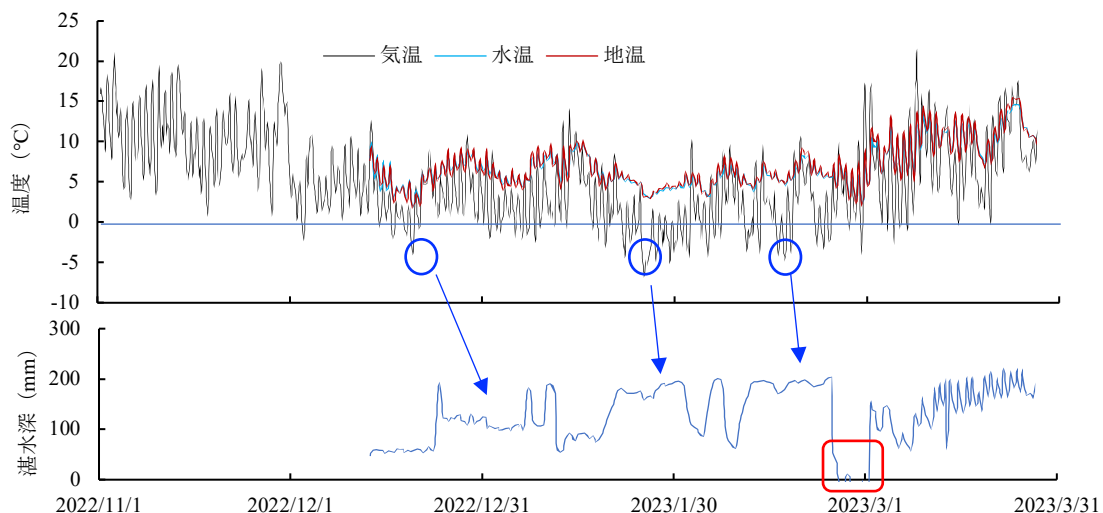


Fig.2 セリ田の気温・水温・地温と湛水深

Air temp, water temp, soil temp and water depth of investigated paddy of water dropwort

低温傾向が見られた。水温と地温はほぼ一致しており、水温によって地温の調節が行われることが分かる。しかし、約 15°C の地下水を用水として利用しているものの、低温傾向により、水尻の測点付近では水温が約 5°C まで低下している時期が見られた。

## 2) セリ田の水管理

セリ田の湛水深はセリの生長に合わせ段階的に上昇させるのが一般的である。しかし、前述のように 2022/12~2023/2 にかけて例年になく低温傾向が見られたため、寒波の襲来にあわせ 200mm 程度の水深による深水管理が施されている（図中矢印）。しかし、それでも低温によって凍害が生じたことから、2/24 に一旦落水し強制更新（株を強制的に倒伏させることで新たな芽を出させる作業）を行ったうえで追肥を行っている（図中四角枠）。そのため、この段階で栽培が一度リセットされたとも言える。

3 月以降は気温が上昇したことでセリの生育も順調となり、水温も 10°C 前後に保たれている。この後は、生長度合いにあわせて湛水深を段階的に上昇させ、4 月上旬に収穫が行われる予定となっている。湛水深はセリの芽が少し出る程度に保つことから、3 月以降の湛水深の状況がセリの生育の段階を示していると言える。

## 3) SNS を通じた情報共有と産地間共存の動き

セリ田の管理情報は生産者にとって財産といえ、従来は秘匿することで産地の独自性を維持してきた。しかし M 園を中心とした東北の 10 数件のセリ生産者が SNS を通じて連携し、水管理や施肥などの栽培管理情報の共有や新規就農者への助言を行っている。中でも興味深いのが、生産者間の「受注の共有」である。例えば、2023 年 1 月に M 園で対応しきれない受注に対し秋田の O 園が代替で東京の料理店に出荷するなど、SNS を通じた産地間の連携と共存に向けた動きが進んでおり大いに注目される。

## 4. おわりに

今後も栽培情報をデータ化することで、小規模経営が多いセリなどの伝統野菜の生産者による産地間の連携・共存に向けた活動を支援していく予定である。

参考文献：1) 加藤・千葉（2019）北限の栽培セリ「一町田セリ」の生育環境と栽培方法，NN 学会大会 2019 要旨  
2) 加藤・千葉（2018）北限の栽培セリ「一町田セリ」の生育環境と栽培方法，NN 学会大会 2018 要旨  
3) 加藤ら（2017）： フィールドモニタリングによるセリ栽培のメソッド化，NN 学会大会 2017 要旨。